

## E.M.フォースターのS.F.「機械は止まる」

向井千代子<sup>§</sup>

### 1. はじめに

E.M.フォースター (Forster) の短編小説にはファンタジーと呼ばれるものが多いのだが、1909年発表の「機械は止まる」(“The Machine Stops”) はサイエンス・フィクションのジャンルに属するもので、彼自身短編集の「序」において「H. G. Wellsの初期の天国の一つに対する反応である」(6) \*と説明している。ウェルズの描く未来社会は必ずしも楽観的とは言えないと思うが、ウェルズの初期の作品の中で科学の発達を楽観視するようなものがあって、それに対する批判の気持ちからこの作品が生まれたということであろう。ウェルズの『タイム・マシーン』(The *Time Machine*, 1895) の描く未来の社会では人間はむしろ退化して原始時代のような状態にあり、地上に住む美しい外見の人間と地下に住む醜い人間族とに分れている。一方、後のオルダス・ハックスレー (Aldous Huxley) の『すばらしい新世界』(Brave New World, 1932) の未来においては、人間は人工授精により工場で試験管の中で製造され、その属する階級に応じて一方的な教育がなされ、ほとんど自由な発想を行わない、機械的な、しかし決して社会そのものに不満を抱くことのない人間となる。ジョージ・オーウェル (George Orwell) の『1984』(Nineteen eighty-four, 1949) にしてもウィリアム・ゴールディング (William Golding) の『蠅の王』(Lord of the Flies,

---

<sup>§</sup>白鷗大学教育学部

1954) にしても人類の未来は暗いものとして描かれている。フォースターの描く未来社会は、すべて機械によって制御された、一見便利この上ない世界であるが、その世界に疑問を抱く登場人物の目を通して、機械一辺倒の世界の持つ問題点を浮き立たせている。その点では統制された未来世界をサヴェッジ (Savage) という、試験管から産まれたのではない人物の目を通して描くことによって矛盾点を明らかにするというハックスレーの作品の先取りとも言える作品である。

## 2. あらすじ

作品は3部構成になっている。「飛行船」(The Air-ship) と題された第一部では、息子クノ (Kuno) から訪ねてきてほしいという連絡を受けた母親のヴァシティ (Vashtie) が自分の住む南半球のオーストラリアから飛行船に乗って息子の住むイギリスまで旅をする過程が描かれる。その描写を通じて読者はこの話の設定されている未来社会の仕組みを理解する事が出来る。出だしの文章「できれば蜂の巣のような六角形の小さな部屋を想像してください」(109) に示唆されるように、この未来世界では人類は地下世界に蜂の巣状の部屋を作って、一人一人孤立して住んでいる。その部屋はすべて機械で制御されており、たくさんのボタンがあって「機械の書」(the book of the Machine) と呼ばれる取扱説明書によって、あれこれのボタンを押せば衣食住のすべてが自動的に支給される仕組みになっている。人々は直接出会う必要はなく、テレビ電話のようなもので連絡を取る。ヴァシティの楽しみは知的なもので、自分で講演会を開いたり、人々の講演を聴いたりして楽しむのだが、講演会場に足を運ぶ必要はなく、ボタン一つで多くの人が連絡を取り、講演を楽しむことが出来る。こんな具合だから人々の中で、機械への信頼が宗教的な崇拜心にまで高まっていきそうな気配である。人々から接触を求める連絡が入り続ける中で、ヴァシティは息子クノと話すことを選び、他の人との連絡を断って5分間だけと

いう約束の下にクノと会話をする。その電話でクノは「自分を訪ねてきてほしい」と頼む。この時代には人々が直接顔を合わせることは時代遅れと考えられており、ヴァシュティは嫌がる。クノは「自分は地表を訪れたいと思っているのだ」と伝える。数日間引き伸ばした後に、ヴァシュティは嫌々ながらも飛行船に乗って息子を訪ねることにする。この時代、人々は身体を使うことが少なくなっていて、ほんのちょっとでも身体を動かすことをおっくうがっているようである。地下深くに住んでいるので、まずドアを開け、車を呼んでエレベーターのところまで行き、エレベーターに乗り、やっと地上部近くの飛行船発着所にたどり着く。この時代は、飛行船による旅は流行っておらず、どうしても命じられてする者以外は利用せず、ほとんど無人に近い飛行船が地上を行き来している。どうして人々が旅をしなくなったかという、どこへ行っても同じ景色であるからである。地中に暮らしているならば地上部の景色は珍しかろうと思うのだが、ヴァシュティは魅力を感じない。飛行船はヒマラヤ山脈の上を飛ぶが彼女は感動もせず、むしろ昇ってきた朝日の光を直接に受けることに不快感を覚え、青空も美しいとは感じず、窓の覆いが降りないことを理由に席替えを申し出る。人々はそれぞれが隔離された席についており、たまたまスチュワーデスがヴァシュティに手を触れると、びっくりし不快に感じる。その中でこの時代には人類は地上部に住めなくなって地下生活をしていることがわかる。

第二部は「修復装置」(The Mending Apparatus)と題され、息子クノを訪ねたヴァシュティが、息子から地上を探検した次第と、しかもその罪によって「住居剥奪の刑」(Homelessness)を受けそうになっていることを聞く。地上部が毒ガスで覆われているこの時代、地上部を訪ねることは別に禁止されていないが、当局にきちんと申し出て、許可を得、呼吸器を持参の上訪ねる必要がある。しかしクノは当局の許可を得ないで、自分勝手に地上を探検したのである。その方法はまずトレーニングを重ねて体力をつけた上で、昔地下の部屋を作った時に労働者たちが使ったはずの換気口

を登って行くのである。もちろん呼吸器は持参する。うまい具合に開口部に出ることに成功するが、そのとき呼吸器が弾き飛ばされて大変なことになる。しかし空気の噴出孔から酸素が出ているので、そこに口をつけてどうにかしのぐ。ちょうど出たところが窪地になっており、そこに酸素が溜まるのでどうにか呼吸できる。クノは地上部の観察をして楽しんでしたが、やがて地上への開口部を毛虫に似た修復用の機械が動き回り、開口部の傷を自動的に治し始める。その毛虫状の機械に襲われて危うくなったところを、地上部に住んでいるらしい一人の女性が救ってくれる。が、彼女はクノの代わりに機械に襲われて絶命する。クノは意識を失っているうちにいつの間にか自分の部屋に戻っており、その行為のために住居剥奪の刑に問われていると言うのである。

クノの話から新たにわかることは、この時代地下生活に耐えられるように人間が生れても、肉体的に強靱な人々は抹殺されるということが行われているということである。そのため人々は長距離を歩くことも出来ず、極度に肉体を排除した生活を強いられている。この時代精神に適応しているヴァシュティはクノの考え方が理解できず、当局が彼に住居剥奪の刑を宣告したのも当然と考え、息子と別れる。

第3部は「住居剥奪者たち」(The Homeless)と題され、前の部から数年後の話となっている。この時代には人々の機械への信頼はますます高まり、一種の宗教にまで化しているが、その一方で機械の仕組みについては理解する人がいなくなっている様子が描かれる。クノは住居剥奪の刑を受けずに済んだらしく、今では南半球の母親の近くに住んでいるようだ。ある日クノから連絡が入り「機械が止まるよ」と警告される。しかしヴァシュティにはそんなことは信じられない。ところがだんだん機械の不具合が多くなり、修理を頼んでもなかなか修理もされなくなり、調子の悪い機械の中で生活することを余儀なくされる。やがて機械の性能があまりに悪くなってきて、パニック状態に陥った人々が地上部に逃れ出ようとして通路は混雑し、毒ガスのせいもあって多くの人が死ぬ。ヴァシュティも耐え

切れず部屋の外に出て、死の直前にクノに再会する。クノも死の直前であるが、かろうじて母親に触れキスをして、「機械の滅びた後に地上部で暮らす住居剥奪刑を受けた人類たちが次の時代を担うだろう」と語りつつ死んで行く。

### 3. 機械社会の実態と問題点

第一部が「飛行船」と題されているのは、この作品が書かれた頃はまだ飛行機が発明されていなかったためである。現在では飛行機が飛行船に取って代わって存在する。その他テレビ電話に当たるものも現在では実現されている。第一部でヴァシュティが具合が悪いと言うと、クノが当局に連絡して、すぐに手当てが施される。こんなふうにももかもが極めて便利になっているのだが、それは裏を返せばすべて機械に管理されているというところで、プライバシーというものがほとんどない。だからクノは電話を通じて語ることを恐れ、母親と直接会って話すことを望むわけである。

「僕はあなたに機械を通さないで会いたいのです」(110)とクノは言う。そして「機械に反対するようなことを言ってはいけませんよ」とたしなめる母親に対して次のように答える。

'You talk as if a god had made the Machine,' cried the other. 'I believe that you pray to it when you are unhappy. Men made it, do not forget that. Great men, but men. The Machine is much, but it is not everything. I see something like you in this plate, but I do not see you. I hear something like you through this telephone, but I do not hear you. That is why I want you to come. Come and stop with me. Pay me a visit, so that we can meet face to face, and talk about the hopes that are in my mind.'  
(110-111)

(「あなたはまるで神様が機械を作ったかのような口を利きますね」と相

手は叫んだ。「不幸せなときは機械にお祈りを捧げるんじゃないですか。忘れないでくださいよ、人間が機械を作ったのです。偉大な人々ですが、人間です。機械は大したものですが、すべてではありません。この盤にあなたのようなものが見えますが、あなたを見ているわけではありません。電話越しにあなたのような声が聞こえますが、それもあなたの声のものではありません。だからあなたに来てほしいのです。来て泊まっていってください。お互いに直接面と向かって会いたいのです。そして僕の心にある希望について話し合いたいのです。）」

ヴァシュティは飛行船での旅に気が進まず、地表の世界に対しても何の感銘も受けないのだが、クノのほうは地球や海や星といったものに惹かれている。そして感銘を受けた星の話をする。「長方形を形作る四つの大きな星のことを知りませんか。その長方形の真ん中に三つの星が固まっており、そこからもう三つの星が下がっているのです…それらは人間のようだと思います。四つの星は人間の肩と膝です。真ん中の三つの星は昔人間が身に付けていたベルトのようであり、下がっている三つの星は剣なのです。」(111) これは当然オリオン座のことである。それをクノは一度飛行船の中から眺めたが、今度は飛行船の中からではなくて祖先の人々が眺めたように、地上から眺めてみたいと言う。それに対してヴァシュティは反対する。「地球の表面は埃と泥だけです。地上には何の生物も残っていませんし、呼吸器が必要です。呼吸器無しでは外気の冷たさに死んでしまうでしょう。人は外気に触れると即死しますよ」(112) しかも「そんなことは時代の精神に反することです」という彼女の言葉にクノは自分から接触を絶ってしまう。

「直接」(direct) という言葉がこの作品ではとても重要な言葉であり、直接触れたりすることを嫌うヴァシュティと、直接触れ合うことを求めるクノが対照的に描かれている。例えば「ヴァシュティは直接経験の恐怖(horror of direct experience)に襲われた」(115) とある。彼女はクノを産

んでからのことを考えるが、クノは公の保育園で育てられ、自分からそこを訪れたのは一回だけであり、クノが何回か訪ねてきて、機械が彼を地球の反対側に住まわせてからは一度も訪問したことがなかった。しかも機械の書には「親の義務は誕生の瞬間に終わる」と書かれている。だからクノに会いに行く必要もないのだが、彼が望むのならと旅に出るのである。飛行船乗り場で飛行船を見たとき再び「直接経験の恐怖」がよみがえってくる。何故なら飛行船は外気に晒されて汚れており、匂うのである。この辺の描写からは、文明化された清潔な生活に慣れている現代人の、汚れや匂いというものを極端に嫌う性向との共通点を考えさせられる。彼女はまた他の旅行者たちの視線に晒されることも不快に思う。前を行く男が機械の書を落とすが、室内であれば床がひとりでに本を拾ってくれるが飛行船においてはそのような設備はない。しかも人間の筋力が退化していて本を拾うこともうまくできないのである。

次に第二部で明かされる、この時代において当局は肉体的に強健なものを排除するという事実についてもう少し詳しく見ておくことにする。

By these days it was a demerit to be muscular. Each infant was examined at birth, and all who promised undue strength were destroyed. Humanitarians may protest, but it would have been no true kindness to let an athlete live; he would never have been happy in that state of life to which the Machine had called him; he would have yearned for trees to climb, rivers to bathe in, meadows and hills against which he might measure his body. Man must be adapted to his surroundings, must he not? In the dawn of the world our weakly must be exposed on Mount Taygetus, in its twilight our strong will suffer euthanasia, that the Machine may progress, that the Machine may progress, that the Machine may progress eternally. (124-125)

(この頃までに筋骨たくましいことは欠点となっていた。誕生時に幼

兒は検査され、過度に強健な人間はすべて処分された。人道主義者たちは抗議するだろうが、スポーツマンを生かしておくのは本当の親切とはならなかったろう。そういう人は機械が要求する生活状態においては幸せにはなれなかったろう。木に登ったり、川で水浴びをしたがったろうし、自分の体力を測るための牧場や丘を欲しただろう。人間は環境に適応しなければならないのではないか。世界の曙の時期には弱きものはテイゲタス山（スパルタにある山の名）に晒されねばならなかったが、世界の黄昏の時期には強い人間は安楽死させられるだろう、そして機械が進歩するのだ。機械は進歩する、永遠に進歩するだろう。）

このような皮肉な指摘の背後には、19世紀末から20世紀初めにかけて流行した優生学（eugenics）への批判が感じられる。優生学とは、結婚制限、断種、隔離政策によって好ましくない遺伝子を排除しようという考え方であり、ナチスによるユダヤ人迫害の理論的根拠となった理論である。別の場所に「クノは最近父親になりたいと委員会に申し出たが拒否された」（126）という説明も出てくる。

このあと、クノの言葉を借りて、いかにして体力強化を図ったか、それによって何を学んだかが語られる。

‘You know that we have lost the sense of space. We say “space is annihilated”, but we have annihilated not space but the sense thereof. We have lost a part of ourselves. I determined to recover it, and I began by walking up and down the platform of the railway outside my room. Up and down, until I was tired, and so did recapture the meaning of “Near” and “Far” “Near” is the place to which I can get quickly on my own feet, not a place to which the train or the air-ship will take me quickly……Man is the measure. That was my first lesson. Man’s feet are the measure for distance, his hands are the measure for ownership,

his body is the measure for all that is lovable and desirable and strong.  
(125)

（「ぼくたちは空間の感覚を失ってしまったのだよ。『空間は消失した』と言うが、消失したのは空間じゃなくてその感覚なんだ。ぼくたちは自分の一部を失ったのだ。ぼくはそれを取り戻そうとした。部屋の外の列車の軌道を歩くことから始めたんだ。行ったり来たり、行ったり来たり、疲れるまでね。そうやって『近い』と『遠い』の意味を捉え直したんだ。『近い』というのは自分の足で早く行けるところであって、列車や飛行船がぼくを早く連れて行ってくれるところのことではないんだ…人間が尺度だ。それがぼくの最初に学んだことだ。人間の足は距離の尺度であり、人間の手は所有の尺度であり、肉体はすべての愛すべき欲すべきそして強靱なものの尺度なのだ。」）

クノが学んだこの教訓は重要な教訓である。機械の発達によって人間の本来の能力が退化していくということは今現在私たちが経験していることに近い。現在私たちは私たちよりも記憶力のよいコンピューター制御の品々に取り巻かれて、日々人間の能力の限界を思い知らされている。もっともフォースターの人間中心主義のものの見方は、人間の便利さのみを追求した末に環境汚染を引き起こして、地球温暖化などにつながっている現在の状態を考えれば限定付きで受け入れなければならないという意見もある。しかし『ハワーズ・エンド』(Howards End, 1910) でイギリスの自然が都市化によって失われることを嘆いたフォースターであるから、人間中心とはいえ、自然の一部としての人間を念頭に置いているはずである。

クノが訪れた地表はエセックスの平原であり、かつてアルフレッド大王が活躍したところである。そのような設定に対する思い入れはフォースター独自のものであろう。つまりイギリスの原初の時代とのつながりをクノに経験させたいという思い入れがフォースターにあったということである。クノは地表を訪れたときの興奮を次のように語る。

'You, who have just crossed the Roof of the World, will not want to hear an account of the little hills that I saw—low colourless hills. But to me they were loving and the turf that covered them was a skin, under which their muscles rippled, and I felt that those hills had called with incalculable force to men in the past, and that men had loved them. Now they sleep—perhaps for ever. They commune with humanity in dreams. Happy the man, happy the woman, who awakes the hills of Wessex. For though they sleep, they will never die.' (130-131)

(世界の屋根を通過してきたばかりのあなたはぼくの見た小さな丘の話なんて聞きたくないでしょうね。低い色褪せた丘の話なんて。でもぼくにとってはそれは愛すべきものであり、丘を覆っている芝は皮膚で、その下では丘たちの筋肉が脈打っていたのです。ぼくはあれらの丘が過去の人間たちに向かって測り知れない力をもって呼びかけ、人間たちも丘を愛したと感じました。今は丘たちは眠っています、たぶん永遠に。丘たちは夢の中で人類と語り合っているのです。ウェセックスの丘たちを目覚めさせる男は幸せです。女も幸せです。だって丘たちは眠っているだけで決して死ぬことはないのですから。)

続けてクノは一番核心的な機械を批判する言葉を吐く。

'Cannot you see, cannot all you lecturers see, that it is we that are dying, and that down here the only thing that really lives is the Machine? We created the Machine, to do our will, but we cannot make it do our will now. It has robbed us of the sense of space and of the sense of touch, it has blurred every human relation and narrowed down love to a carnal act, it has paralysed our bodies and our wills, and now it compels us to worship it. The Machine develops—but not on our lines. The Machine

proceeds—but not to our goal.’ (131)

（「わからないのですか、講演者たちはわかっていないんですか、死にかけているのは私たちだけだっことが。ここで唯一本当に生きているのは機械だけだっことが。私たちは機械を作りました。思い通りにさせようと思って。だけど今では機械に思い通りのことをさせられない。機械はぼくたちから空間の意識や触角の意識を奪ってしまった。すべての人間関係を曖昧にし、愛を肉体の行為のみに限定してしまった。肉体や意志力を麻痺させ、今や機械を崇拜することを強制する。機械は発達するが、私たちに合うようにではない。機械は進歩するが、私たちの目的に向かってではない。）」

つまり主客転倒が起こっているのである。人間の便利のために発明した機械が便利になり過ぎて機械に人間が使われるような事態に瀕しているのである。確かに現在でも場合によっては人間が機械に使われているような事態が存在する。

第3部ではその事態がさらに進行して、機械を使いこなす人間がいなくなり、世界の破滅に至る状況が描かれている。クノの事件から数年の間に二つのことが起こったと言う。一つは呼吸器の廃止である。ということは地上を訪れる人間が出ないようにという配慮であろう。そしてその時代で最も進歩的な人間は「直接手に入れた観念に注意せよ」(‘Beware of first-hand ideas!’)と叫んだ(135)と言う。つまりは直接的経験の軽視の傾向である。もう一つの変化は機械への崇拜熱が加速して、宗教的にまでなったということである。そして宗教的な迫害も秘かに行われるようになる。

Persecution—that also was present. It did not break out, for reasons that will be set forward shortly. But it was latent, and all who did not accept the minimum known as ‘undenominational Mechanism’ lived in danger of Homelessness, which means death, as we know. (137)

（迫害もまた存在した。後に説明する理由から表ざたにはならなかったが。だがそれは秘かに行われていた。「非特定宗派の機械主義」として知られる最小限のこを受け入れない者はすべて住居剥奪の危険の中に暮らしていた。それは死を意味していた。）

こうして最後には機械の故障が次々と起こり、世界は破滅するのである。

#### 4. 評価

この作品の評価として、最初に述べたようにハックスレーの『すばらしい新世界』やジョージ・オーウェルの『1984年』のようないわゆる反ユートピア小説のさきがけとなる小説であるという点が上げられるであろう。フォースターの作品では機械社会を操る政府については「中央委員会」(the Central Committee) という名称が第3部に出ているだけで詳しく語られていないが、ハックスレーやオーウェルの場合は管理社会の中枢の人物が登場したりするという点が違っている。特にオーウェルの場合はスターリンのような独裁者の支配する社会への批判を念頭に置いて書いているので、一種の政治小説という特徴を備えている。フォースターの場合は政治に対する関心よりは、人間に対する関心のほうが強く、機械中心主義に対して、自然な存在としての人間を強調する姿勢が顕著である。短編小説とはいえ、一種予言的な書物ということができる。

批評家の中でこの作品を最も高く評価するのはC.J.Summersで、「進歩という観念に対する攻撃として『機械は止まる』は全体的に成功している。特にフォースターが自分の社会において常に攻撃している非人間的な傾向の、未来への説得力のある想像的投影として興味深い。つまり社会的宗教的因習の押し付け、人間の自然からの阻害、喜びより安楽さの追求、肉体の軽視によって人間が直接経験を妨げられるという傾向である」(221)と述べている。

もう一つ気がついたことは、未来社会の住人の生活ぶりが衣食住すべて保証されており、知的関心を中心とした生活をしているところである。彼らの会話の主たる話題は「最近何か思いつきましたか」ということである。その点がフォースター自身の属していたイギリスの上中流階級の生活ぶりと共通していることに注意したい。つまりこの小説は機械に管理された未来社会の人間たちの生活が少しも「人間的」でないことを描きながら、実は同時代の上中流階級の知識人たちの生活ぶりに対する強烈な批判にもなっているのである。自然や肉体への尊重は、現実から遊離して観念の遊びに終始する知識人階級への抗議でもあるのだ。その点でフォースターの立場は『チャタレー夫人の恋人』(Lady Chatterley's Lover, 1928)を書いたD. H. ロレンス (Lawrence) と共通のものを持っている。例えばロレンスは『チャタレー夫人の恋人』の第4章で知識人階級に属する人物の口を借りて次のように言う。

“Real knowledge comes out of the whole corpus of the consciousness, out of your belly and your penis as much as out of your brain or mind ……While you live your life, you are in some way an organic whole with all life. But once you start mental life, you pluck the apple. You’ve severed the connection between the apple and the tree: the organic connection. And if you’ve got nothing in your life but the mental life, then you yourself are a plucked apple, you’ve fallen off the tree.” (37)

(「本物の知識は意識の全体から来る。君の脳や精神ばかりでなく、君の腹やペニスから出てくるのだ……君が生きている限りは君はある意味では生命を持った有機的な全体だ。だがひとたび知的生活を始めると林檎を取ったことになる。君は林檎と木との間のつながりを絶ってしまったのだ。有機的なつながりをね。だからもし君の生活に知的生活しかないとしたら、君は枝から切り離された林檎なのだよ。木から落ちてしまったのさ。)」

ここでの林檎の比喻はもちろん「聖書」の「知恵の木の実」とも称される「禁断の木の実」を食べたアダムとイヴの話を踏まえているのだが、肉体から離れた「知」への偏向が人間の自然な生を脅かすことの指摘という点でフォースターと同じ見解である。

しかしロレンスとフォースターの違いは、知識人への批判意識を共有しながらも、フォースターは自分が知識人階級の一員であり、自分自身の中に上中流階級の生活に毒されたところがあることを忘れられないところにある。そのためにこの小説でもフォースターは滅び行くクノと同じ側に身を置きながら、地上に生きる強健な肉体を持った住居剥奪者（ホームレス）たち、フォースターの同時代人であれば労働者階級の人々へ未来への希望を託したのだと考えられる。

\*使用テキストは E.M.Forster : *Collected Short Stories* (Penguin Books, 1982)、ページ番号はこれによる。翻訳は筆者のものであるが、「E.M.フォースター短編選集(Ⅲ)」(藤村公輝訳、檸檬社、2000)を参考にした。

#### 引用・参考文献

- Cavaliers, Glen. *A Reading of E.M.Forster*, Macmillan Press, 1986. First edition 1979.
- Forster, E.M. "The Machine Stops", *Collected Short Stories*, pp.109-146, Penguin Books, 1982. First published 1947.
- フォースター、藤村公輝訳『E.M.フォースター短編選集(Ⅲ)』、檸檬社(レモン新書)、2000年。
- Godfrey, Denis. *E.M.Forster's Other Kingdom*, Edinburgh, London: Oliver & Boyd, 1968.
- Huxley, Aldous. *Brave New World*, Perennial Classics, 1998. First published 1932.
- King, Francis. *E.M.Forster*, London: Thames and Hudson, 1988. First published 1978.
- Lawrence, D.H. *Lady Chatterley's Lover*, Penguin Books, 1994. First published 1928.
- Stone, Wilfred. *The Cave and the Mountain—A Study of E.M.Forster*, Stanford:Stanford UP/ London: Oxford UP, 1966.
- Summers, Claude J. *E.M.Forster*, New York: Frederick Ungar Publishing Co.,1983.